

## 標準型雨量計の改良案\*

篠原 武 次\*\*

国内で昔から使用されている口径 20cm のふつうの雨量計は、装置が簡単な上に、風の影響もわりあいすくなく、気象測器としては、すぐれたものの一つだと思う。だからこそ、現在でも標準的な雨量計として、広く利用されている。

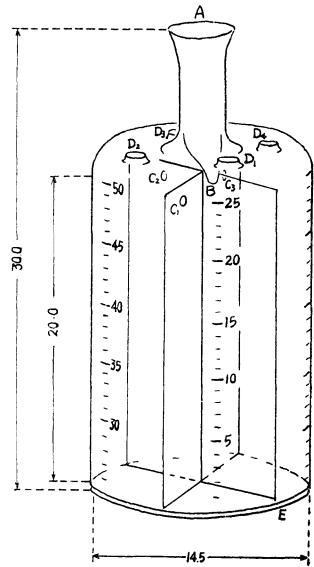
ところが、問題は雨量ますにある。目盛が10mm までしかないため、ちょっと大雨が降ると、ますで何杯にもなるので、測っているうちに忘れてしまうことがある。ここに示す改良案は、受水器にはいった雨水を雨量ますを兼ねた貯水ビンに導くもので、100mm までの雨量がひと目で読みとることができる。

ビンの構造は、図を見ればだいたいわかると思うが、ビンの中は隔壁で4つに区切られ、雨水は、まず第1の容器にはいり、それがいっぱいになると、第2の容器にあふれ出す。以下順次、雨量が多いときは、第3、第4の容器にもたまる。第1容器の外壁には、雨量25mm までの目盛が、第2には25~50mm、第3には50~75mm、第4には75~100mmの目盛がついている。雨量の1mm は水位の8mm に相当するので、目分量で1/10mm まで読みとることができる。

\* On the Improvement of Raingage.

\*\* Takeji Shinohara 気象庁測候課  
—1963年7月19日受理—

この大きさのビンは、現在使用されている貯水ビンのかわりにそのまま用いることができる。プラスチックで作り、ビンの底にステンレスの円盤でも貼りつけておけば、安定がいいと思う。



A: 雨水の入口, B: 第1の容器への入口,  
C<sub>1</sub>, C<sub>2</sub>, C<sub>3</sub>: あふれ口, D<sub>1</sub>, D<sub>2</sub>, D<sub>3</sub>, D<sub>4</sub>: 排水口  
E: おもりの金属板, (寸法はcm)

## 巻雲について

巻雲の読みを「かんうん」とすることに気象学会で一応決定したことについては御承知かと思う。一応というのは、まだ文部省から公布されていないから、改訂の余地が残されているという意味であらう。

これについて気象庁測候課から巻雲の代りに絹雲(けんうん)を採用したらいかかという提案があった。理由は次のようである。

巻雲という名称についても、その文字よりも発音(けんうん)の方になじみが深く、残すとすれば文字よりもむしろ発音の方にしたい。幸にして絹雲という極めて適切と思われる当て字がある。この雲の特徴は絹のような光沢をもっているか、せんい状をしていることであって、いずれも絹に関連がある。

巻雲という文字は cirrus (毛のかたまり、馬の毛のふさ、鳥の毛のふさの意) という語句を直訳したのではないかと思われるが、この語句の現在の定義にはむしろ絹雲の方がふさわしい。特にかつては cirrus の特徴はすじ状をしていることであつたが、International Cloud Atlas (1956) では、すじ状をしていなくても絹のような光沢をもっていれば cirrus と名づけられることが、定義の中でうしなわれるようになった。

理論整然たる提案であつて、だいたい巻雲を「かんうん」としたのは巻に「けん」という読みがないということから、「けん雲」では他の雲形名称とのバランスがとれないので、した措置である。

絹雲、絹積雲、絹層雲というこの新しい提案に対して皆さんの御意見はいかがですか。(桜庭信一)